第２　教育研究団体の意見・評価

①　日本地理教育学会

（代表者　西　脇　保　幸　　会員数　約530人）
ＴＥＬ　042-329-7729

地　　理　　Ａ

１　前　　文

今年度の「地理Ａ」の出題は、地理の基礎的事項、国境を越えた様々な結びつき、東南アジアの地誌、地球的課題と国際協力、地域調査と昨年同様５題の大問で構成された。大問数は変わらないものの、問題数については昨年より３問増加し、「地理Ｂ」と同じく36問となった。「地理Ａ」は「地理Ｂ」の簡易版という位置づけではないことから、今年度の問題数が妥当といえるのではないだろうか。また、出題形式も単純に知識を問うのではなく、地形図・主題図・グラフ・統計資料・景観写真等を用いて多面的に地理的思考力を測ろうという設問形式は評価できるものである。日頃の地理学習の成果が試されるこのような形式の問題を今後も継続して出題していただきたい。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第１問　第１問は例年通りの内容であり、地図やグラフ等の分量もまた例年通りである。学習者にとってはこれらの問題を解くこと自体が学習になるような良問といえる設問も多数あるが、第１問についてはもう少し地図を駆使した問いかけがあってもよいのではないだろうか。特に、主題図やＧＩＳ・ＧＰＳ・ＲＳ（リモートセンシング）に関する出題の部分では図による設問が是非ほしい。これらに関する学習は、授業では地図などを使った作業的な学習に位置づけられる。作業的・体験的な学習は地理の学習の特徴であるため、この成果を問うような出題をぜひ期待したい。

問１　出題の観点は素晴らしいが、出題文に疑問がある。地図中に示してあるＡ－Ｂ間の太線は北緯60度の緯線であり大圏航路ではない。出題文では「距離」という言葉を用いているので、大圏航路を思い浮かべる。解答者はこの太線が距離だと考えてしまい距離の概念を誤解させた可能性がある。実際のＡ－Ｂ間の大圏航路は4,600km位である。地図中の北緯60度の緯線を太線で示し、選択肢からの解答を5,000kmとするのであれば、出題文を「Ａ－Ｂ間の北緯60度の緯線の長さ」「Ａ－Ｂ間の北緯60度の緯線を経由した際の距離」などとすべきではないだろうか。

問２　新期造山帯とプレートの境界の一致が解答のための前提知識となる。平易な問題。

問３　有機物に富む肥沃な土壌の形成には植生が必要という植生と土壌との関係が必要な知識である。Ｋ以外の地点は砂漠気候（ＢＷ）下であり、植生は乏しい。標準レベルの問題。

問４　単位面積あたりの太陽放射熱量は低緯度のほうが高緯度よりも大きいので、降水、蒸発とも低緯度で大きく、高緯度で小さくなる。中緯度高圧帯の影響下では下降気流が優勢にな

り、雲が発生しにくくなるため、降水は少なく、蒸発は大きくなる。年間における日照時間の季節差が高緯度地域は大きいため気温の年較差が大きい。これらの３点から３種のグラフを見抜く問いかけであるが、グラフの相違の様子が適切であり良問に仕上がっている。

問５　基本的な農産物の栽培条件と気候との関係である。平易な問題である。

問６　せっかくの主題図に関する問いかけであるのに、これでは定義だけの問いかけになってしまう。地図を使っての設問にしてほしかった。

問７　地形と水系の関係を問う良問である。ただ、地形がやや単純なので、もう少し複雑な等高線で表現された地形の部分での設問にして難易度をやや上げてもよかったかもしれない。

問８　GPS、GIS、RSなどに関する問いかけではあるが、言葉のやりとりのみになってしまっている。図を交えた設問にしてほしかった。

第２問　国境を越えた結びつきに関して、ヒト、モノの移動と、移動手段（交通）について問うた問題。問題の資料として使われているのが写真と表のみである。しかも、写真はなくても解答に支障はない。他の大問とのバランスもあるが、地図もしくはグラフを用いた出題が１問はほしいところである。

問１　日本の貿易について基礎的な知識を問うている。どの国を選ぶかが問題の質を左右する。特徴が明確な４つの国を選んでおり、基礎的な知識を問うには適切である。

問２　解答は容易である。ただし、①～④の人口移動の時期が異なっており、かつ問題に明示されていないことに違和感がある。

問３　受験生にとって統計自体は初見であろうが、常識的に解答可能であろう。大学入試レベルとしてはやさしい。

問４　出題に当たって写真を使っているが、解答には必ずしも必要としない。写真の使い方について工夫が必要である。

問５　５つの国の人口規模と位置関係という基礎的な知識をもとに類推すると正答は得られる。地理的な思考力を必要とする良問。

問６　誤りがあまりに明確で容易。大学入試レベルとしては疑問が残る。

問７　東京からの距離で２つのグループ（クアラルンプール、ホノルルとフランクフルト、ロサンゼルス）に分け、それぞれ２つの都市との関係を考えるというステップで考える。地理的な思考を要する良問。

第３問　東南アジアの自然、産業、文化に関する問題である。はじめに東南アジアの地図が示され、一部の問題ではグラフや写真といった資料を活用している。東南アジアの基本的な地理的特徴を理解しているかを問うものであり、標準的な問題といえる。

問１　シンガポールは赤道に近い熱帯雨林気候であるため、年中気温が高く、降水量も年間を通して多い。大問の最初に示された地図には赤道が描かれていないが、近年アジアの金融センターとして経済発展しているシンガポールの位置を把握し、そこが熱帯雨林気候の地域であることをおさえられれば十分解答できる。東南アジア各地の気温と降水量の特徴について考えさせる良問であるといえる。

問２　東南アジアの主な自然災害としてエヤワディーデルタは熱帯低気圧が原因の洪水の被害を受けやすいこと、スマトラ沖を震源とする大きな地震があったこと、新期造山帯のジャワ

島では現在も火山活動が活発なことをおさえていれば容易に解答できる。東南アジアの自然災害に関する知識を問う基本的な問題といえる。

問３　どの説明文も各国のよく知られている特徴を述べており、解答しやすくなっている。カンボジアを説明した文では、寺院遺跡（アンコール遺跡）や国際河川（メコン川）について触れられている。東南アジア各国の産業の基本的な知識を問う良問といえる。

問４　説明文中の下線部には住居や内水面漁業、畜産業、農業について書かれているが、仏教文化のラオスで牛を聖なる動物とした記述が誤っていることは容易に気付くことができるだろう。産業と文化（宗教）の双方の知識を活用させて考えさせる基本的な問題である。

問５　東南アジアにおいてマレーシアとシンガポールに多く見られるマレー系の民族がイスラム教を信仰していることはよく知られており、容易に解答することができると考えられる。フィリピンでも、ミンダナオ島西部などに居住しているモロ族などがイスラム教徒として知られている。東南アジアの宗教分布についての理解を問う良問といえる。

問６　近年の東南アジアの工業化に伴う農村部の生活の変化についての知識を問う標準的な問題である。工場労働による現金収入の増加が農村部の耐久消費財の普及に一役買っていること、工業開発によって農村部のインフラストラクチャーの整備が進む一方で出稼ぎ労働者が増加していること、若い女性が低賃金で縫製工場で働いていることなどは、最近日本でもよく知られている。このことから、工業化によって廃村になる農村が多いという選択肢を、不適当なものと選択することができよう。

問７　東南アジアの外国文化と関わる日常生活について、主に商業的な面で見られることを扱った標準レベルの問題である。下線部では、シンガポールにおけるショッピングモールの立地・建築、タイのコンビニエンスストアの立地・食文化、ラオスの食文化・農業について記述されている。シンガポールは都市国家であるため郊外に自家用車で買物に行くということはない、インドシナ半島では米の生産量は多いが小麦の生産はあまり行われていない、という２つが誤りであることは容易に判断できる。写真を使っているが、解答に当たって必ずしも写真を必要としない。工夫が必要である。

第４問　地球的課題をさまざまな角度からみた設問である。地球的課題にテーマを据えているが、問２や問３は「地球的」というよりは「地域的」課題であり、大きな枠組みの中での設問としては、やや無理があるように感じる。

問１　出生率と死亡率から各国の特徴を捉えさせる問題である。それぞれのグループに特徴的な国名が記されており、それらを手がかりにすれば、正答に導くのはさほど難しくない。

問２　３つの河川流域に起こっている問題について答えさせている。解答は容易。

問３　水上家屋が連なるスラム街と後方の高層ビル群を写した写真を判読させる問題である。選択肢の都市の中から容易に答えを導き出せる。

問４　食料問題に関する設問である。各国の状況が説明されているが、「緑の革命」の内容についての知識・理解があれば、解答は容易である。ただ、③の増加という表現は疑問である。

問５　近年、紛争解決や人道支援など、さまざまな場面でNGOやNPOの役割が注目されている。そうしたテーマで出題するのはよいが、今回の出題方法には違和感がある。結果的には、NGOには警察機能は有しないという点と、防波堤建設がNGOではなく、ODAによっ

て行われたという点で、不適な選択肢が排除できるものの、その他の選択肢について、受験生が具体的なNGOの活動団体名を思い浮かべることはできず、一般的にどれもありえる活動内容であるため、出題方法について、再考すべき点があったのではないか。

第５問　例年と同じく地形図読図をまじえた地域調査に関する内容である。設問内容は地図と写真の照合、新旧地形図読図、地図と気候グラフの関係、ハザードからの回避についての写真、分布図と階級区分図の重ね合わせ（オーバーレイ）というように、地理的技能を一通り使っての出題がされており、地域調査についての出題のお手本となるような良問に仕上がっている。

問１　１：200000地勢図と写真撮影地点を照合する設問。写真の撮影範囲・撮影方向と地図のスケールがうまく調和しており、良い問題に仕上がっている。地域調査において現地と地図の照合は最も基本的な技術であり、必ず出題してほしい問題形式である。

問２　新旧地形図の読図問題を火山噴火の前後でとらえて、火山噴火のハザードという観点もまじえた良問である。地形図の有効利用を示している。

問３　地図と気候データを組み合わせた問題。地図とグラフの読み取りをしっかり行えば解答できる問題ではあるが、季節風についての暗示が良い。

問４　災害におけるハザードについての具体的な問題。火山噴出物を避けるための工夫を常識的に考えれば解答できる問題である。

問５　「水はけが良い」「栄養分が乏しい」ということが火山噴出物であるシラスの性質として知っていることが前提である。ここから稲や野菜類の栽培には不向きであることから、まず判断ができる。稲と野菜の判断であるが、これはシラスの分布図との関連性のみでは判断はしにくい。図１の１：200000地勢図も参考にして判断する必要があろう。ここから、この地域の最大の消費地である鹿児島市の位置を確認し、鹿児島市への近接性から鹿児島市周辺が野菜類の生産が多いだろうということと、地勢図そのものから加治木周辺に水田の記号が広く分布していることから稲と野菜類の分布を判断する。論理的な思考力が求められる良問であるが、解答自体に手数がかかり、問５そのものの出題とは離れている図１を利用するということから、やや難問であるともいえる。

問６　インターネット、聞き取り、図書館、アンケートがどのような調査に向いているかを問う問題。前問までが、地図やグラフなどを駆使した問いかけであるので、このような正誤問題を最後に入れることによって良いまとめとなっている。

３　ま　と　め

全体を通して出題内容、問題数や設問形式は概ね適切であったと思われる。しかしながら、以下の点については改善を望みたい。

1)単純な知識や文章の正誤だけを問う問題がみられた。

2)写真等を用いながらも、解答に際し十分に利用されない問題がみられた。

3)常識的に解答可能で、大学入試レベルとしては疑問が残る問題がみられた。

1)については、できるだけ図や写真、グラフ等を用いて地理的な思考力を試すような設問形式を工夫していただきたい。とはいえ、全体のバランスからこのような出題も一定数は必要であることは認めるが、内容やレベル、判別のポイント等を吟味してほしい。2)については、純粋に写真等か

ら読み取れることを問うなどの改善をお願いしたい。これらについては、従前から指摘していることである。3)については、地理を学ばなくても解答できてしまう問題ではなく、地理を学んだ受験生の学習成果が十分に発揮できる（地理を学んだ受験生だからこそ解答できる）問題を作成していただきたい。

地　理　B

1　前　　文

大学入試センター試験のように時間的・分量的に制約された中で、適切な評価をするために、内容、出題形式、難易といった各種のバランスという観点に注目する。とくに地理の科目の特性として、地図、グラフ、写真、衛星画像等の活用には特に重点を置いて分析した。平成25年度の入学生から実施されている新学習指導要領では地理的技能が強調され、地図、グラフが学習において一層重要な役割を担うようになっているからである。試験問題全体を通じて地理的技能を一通り扱うような考え方も必要であると考える。例えば統計地図の表現方法についていえば、第１問で等値線図にて表現された地図を扱ったら、第２問では図形表現図で出題し、第３問では階級区分図を使った分析を問いかけ、第６問ではドットマップである事象の分布を示すというような考え方である。これも地理の試験のバランスの一つの観点といえるだろう。地理的技能の学習は高等学校の地理の授業では学習者（生徒）の興味を惹く授業方法とされている。こうした地理的技能が大学入試センター試験で適切に評価されるようになると、高等学校の地理授業がより活性化すると思われる。

2　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第１問　世界の自然環境に関する問題である。世界地図や模式図、グラフといった資料を活用した出題である。小問ごとに独自の出題がなされている。植生・土壌、河川流量、熱帯低気圧の発生域、世界の大地形、最近約２万年間の海面変化、マングローブの現象と自然環境について幅広く聞いている。全体としては標準的レベルといえる。

問１　模式図に示されている植生帯と土壌帯の変化を読み取り、地球上のどこで見られるかを問う問題である。北アメリカ大陸西岸およびアフリカ中部→スカンディナヴィア半島南部の各線上には途中に乾燥地域が見られる、南アメリカ大陸東岸ではタイガ・ポドゾルは途中に見られないということから、模式図は北アメリカ大陸東岸のものと判断できる。良問である。

問２　アマゾン川、オビ川、長江、マーレ―河の４河川の月平均流量の変化が１枚の折れ線グラフに示されている。気候と河川流量の関係についての理解度を試す良問といえる。

問３　熱帯低気圧は海面付近の海水温の高い地域で発生することがおさえられていれば十分解答できる。低緯度地域であっても、高緯度から寒流が流れ込んでいる海域では熱帯低気圧は発生しない。大洋における海流は中低緯度の恒常風の影響を受け、南半球では反時計回りで循環している。ここから東太平洋・東大西洋を寒流が流れていることが判断できる。熱帯低気圧の発生域が海流の流れ方と関連があることを理解しているかを確認する良問といえる。

問４　アフリカ大地溝帯の特徴、新期造山帯における造山運動の開始時期、楯状地・卓状地の特徴といった地形の基本的事項について扱われており、容易に解答することができる。

問５　①と④は正解な記述であると判断できる。大陸棚は一般的に約130m以浅の海底をいうが、グラフによると約１万5000年前の海面の高さは現在よりも約110～120m低いとなっており、大陸棚のほとんどは海面下にならない。よって②は正確な記述でないと判断でき、こ

れが解答となるが、③の記述は正確かどうか判断に迷う。海面上昇により谷に海水が侵入して形成される海岸地形はリアス海岸もしくはフィヨルド（峡湾）であり、エスチュアリーは平野の一部に海水が侵入し形成される地形と考えることができるからである（町田ほか『地形学辞典』にも、「エスチュアリー」の項に、小起伏の陸地域が沈水し、谷底傾斜の小さい下流地域が沈水すると、ラッパ状の平面形を持つ入江が形成される、とある）。「谷」の定義をどのように扱うかというところで、記述文がやや言葉足らずとなっており、疑問が残る。

問６　マングローブ分布面積の推定値の推移がグラフに示されているが、グラフは解答に影響を与えず、それとは別に、減少の主な要因が箇条書きで示されており、解答はその中から選ぶようになっている。グラフの内容について考えさせるなど、もう少し設問に工夫を施すべきだと考える。

第２問　エネルギーと産業についての設問。設問・形式のバランスはとれている。ただし、内容・表現等に課題がある問いが複数あり、再考を要する。

問１　①～④の短文のグラフの読み取り部分には下線部がない。そのため解答に当たってグラフを見る必然性が薄れてしまっている。グラフをより活用できるよう工夫が必要と思われる。

問２　再生可能エネルギーの国別の内訳を問うている。それぞれの国の自然条件と社会条件を組み合わせて考えると解答が導き出せる。

問３　日本の農業の地域性を問うている。指標の意味を考えて統計地図をみれば正答に到達できる。しかし、カとクの判別は厳しくやや難問である。

問４　資料がない問題であるが、全体のバランスから考えるとこうした問題も必要かもしれない。③の「トウモロコシ」が誤りであることは、ブラジルではバイオエタノールはサトウキビが主であることからわかる。ただ、トウモロコシはブラジルの主要農産物でかつバイオエタノールの原料でもあるため、引っかけ的な感がある。

問５　４カ国の違いを考える。いずれの国においても比較的高い割合を示す「シ」が機械であることが分かれば、後は食料・飲料と繊維の比較となり正答にたどり着く。やや難問である。

問６　②～④は明らかな誤りを含むので①と解答するのであろう。しかし、日本の自動車メーカーはすでに1960年代（トヨタ）、1970年代（日産）にはタイに生産拠点を設けている。したがって、正答なしとなる可能性がある。文言を精査し、誤解のない表現をお願いしたい。

第３問　都市に関する出題が中心で、加えて村落に関する地形図読図等が加えたれている。グラフや統計地図・地形図などを素材としており、さまざまな観点から総合的に問うている。また問２や問３のように目新しい出題もみられた。

問１　それぞれの国の都市に関する知識が必要な問題だと考えると難問だが、ドイツは平原が多いこと、メキシコは高山都市が発達することなどから３つの国は判別可能であり、おおよその概要がつかめていれば解答可能である。

問２　３都市の交通手段をたずねる問題で、それぞれの都市が位置する国の状況を理解している必要がある。選ばれている都市はそれぞれ明瞭な特徴があるので適切である。良問である。

問３　第一次ベビーブーム世代の移動に注目した出題である。特定のコーホートに注目する出題はこれまで少なく、着眼点が新しい。今後もこのような傾向の出題をお願いしたい。

問４　都市の居住環境の問である。それぞれの都市に関する個別知識の問題となっている。③が正答であるが、高校において中国の市街地再開発を扱うことは少なく、やや難しい。

問５　八郎潟干拓地の地形図を用いた出題である。地形図読図としては標準的だが、丁寧な読み取りを必要としており、解答に時間を要したものと思われる。読図力は地理学習の重要な分野であり、引き続き出題をお願いしたい。

問６　先進国における都市と農村の関係についての出題である。語句を理解しているかどうかの単純な問い方になっているが、基本的語句の理解を出題することも重要だと考える。

第４問　太平洋を中心とした地域に関する設問。図やグラフの用い方でやや気になる部分もあるが、図表の読み取りを通して地理的な思考力を試そうとする設問形式は評価できる。また、地誌の問題としても出題分野にバランスが取れており、難易度も適切である。

問１　大気大循環を理解していれば解答は容易である。基礎的知識を問う標準的問題である。

問２　４地点はいずれも異なる気候区であり、ハイサーグラフの特徴もはっきりしているので解答は容易であろう。

問３　地図を用いながらも、最終的には知識で解答できてしまう。各地域の写真を用いるなどの工夫をすれば、地理的思考力を問う設問になったのではないか。

問４　問い方がやや単純である。加えて、高等学校では、太平洋の個別の島を扱うことは少なく、やや細かな知識問題である。

問５　グラフを用いていながらも、読み取る内容がやや単純である。また、解答に際しては知識が必要になる。もう少しグラフの読み取りが設問に活かされるような問い方を望みたい。

問６　各国からの輸出品の品目と金額の違いがはっきりとしており、容易に解答できる。

第５問　現代世界の諸課題について、おもに人の動きに着目した設問である。時事的な問題に関しては、誤解のないよう文言等の精査が必要である。

問１　図をみると、アフリカのサヘル地帯の国々での難民発生が少ないことから、答えは③が妥当である。しかし、必ずしも、砂漠化の進行にともなう水や食料不足の問題が難民発生の理由ではないとも言い切れない側面もあるのではないか。

問２　３国における難民発生の状況とその背景について答える問題である。各国とも特徴ある事件があり、判別は容易である。

問３　イスラエル、カナダに関する説明文は容易に正解とわかる。しかし、中国に関する記述に関して、近年、沿海部の農民工受け入れが進み、一部の都市では都市戸籍・農民戸籍の統合が行われるようになっている。したがって、必ずしも「奨励」とはならないまでも、制度的に受け入れる基盤が整っている現状を考えると、この選択肢が明らかな不正解とは言いがたいのではないか。

問４　国別の状況を理解するまでにやや時間を要した問題である。海外出稼ぎ労働者の現状や各国の経済状況・人口規模などを勘案すると正解に導ける。

問５　西アジア諸国、とくにイスラム圏における女性労働の問題に関する知識があれば、解答は容易であるが、ホンコンに関しては、共働きは一般的とされるため、この下線の引き方

は、やや検討を要する問題である。

第６問　例年と同じく地形図読図をまじえた地域調査に関する内容である。桜島周辺という特徴が浮き彫りになりやすい地域を出題している。設問内容は地図と写真の照合、新旧地形図読図、地図と気候グラフの関係、ハザードからの回避についての写真、分布図と階級区分図の重ね合わせ（オーバーレイ）というように、地理的技能を一通り使っての出題がされており、地域調査についての出題のお手本となるような良問に問題に仕上がっている。

問１　１：200000地勢図と写真撮影地点を照合する設問。写真の撮影範囲・撮影方向と地図のスケールがうまく調和しており、良い問題に仕上がっている。地域調査において現地と地図の照合は最も基本的な技術であり、必ず出題してほしい問題形式である。

問２　新旧地形図の読図問題を火山噴火の前後でとらえて、火山噴火のハザードという観点もまじえた良問である。地形図の有効利用を示している。

問３　地図と気候データを組み合わせた問題。地図とグラフの読み取りをしっかり行えば解答できる問題ではあるが、季節風についての暗示が良い。

問４　災害におけるハザードについての具体的な問題。火山噴出物を避けるための工夫を常識的に考えれば解答できる問題である。

問５　「水はけが良い」「栄養分が乏しい」が火山噴出物であるシラスの性質と、この地域最大の市場である鹿児島市との近接性が解法のポイントである。シラスの分布で稲とイモ類を判断し、チューネン理論から市場への近接性ということでイモ類と野菜類栽培を判断する。図１の１：200000地勢図もまた判断の材料となる。鹿児島市の位置を確認し、加治木周辺に水田の記号が広く分布していることから稲と野菜類の分布を判断する。また、75％を超える栽培面積が複数の地域でみられるということから稲という判断も可能であろう。良問である。

問６　インターネット、聞き取り、図書館、アンケートがどのような調査に向いているかを問う問題。前問までが、地図やグラフなどを駆使した問いかけであるので、このような正誤問題を最後に入れることによって良いまとめとなっている。

３　ま　と　め

全体としては、内容、レベル、分量とも適切であると判断する。やや気になったのは解答方法である。４択一、３つの組合せ解答、２つの正誤組み合わせ解答といった解答方法に加えて第５問の問３のように一つの設問に２つの解答を選ばせるような形式が加わっている。３つの組み合わせの６択一の解答や、４つの組み合わせがあるもののうち１つだけ選べというような形式によって、いわば知識を“圧縮”し、限られた設問数によって評価をしようとしているのに対して逆のようなスタイルの形式ではないだろうか。このような問は他の問よりも配点が多くなり、この問いの重要性が他よりも大きいということになってしまう。このような解答方法は避けてほしいと思う。もう一つは、追試験地理Ｂにおいては、階級区分図を用いた出題が３問出題されていたことであり、そのうちの１問は等値線図など他の技法を用いた出題であれば、地理的技能という観点で、良いバランスとなったのではと思われる。地図を多用したりバランスを考慮したりと作問における労力は大きいと思われるが、大学入試センター試験であればこそ、期待は大きい。今後も良問の出題を望む。

②　全国地理教育研究会

（代表者　遠　藤　文　雄　　会員数　約500人）
ＴＥＬ　0422-46-4181

１　前　　文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教師を中心として構成された研究組織で、会員は年一回の研究大会と年二回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の問題には強い関心を持っている。毎年、センター試験の実施後には検討会を設け、さまざまな角度から意見交換を行っている。今回も、その場で出された声をまとめ、本会の意見・評価としたい。

２　試験問題の程度・設問数・形式等

⑴　試験問題の程度について

今年度のセンター試験追試験は、地理Ａについては、例年の追試験や本試験と比較しても概ね平易で取り組みやすい小問が並んだ印象で、学習の成果を問う適正なレベルの作問がなされたと評価する。地理Ｂについては、昨年度と比較して易化してはいるが、本試験と比較するとやや凝ったつくりになっていたり粗さがあったりと、バランスに少し問題がある感じが否めない。全体としては、小問単位でみると、概ね「高等学校までの地理の学習の成果を適切に問うている」といえるが、その中で、旧課程的な知識に依拠した設問が地理Ａ・地理Ｂともにまだみられることは残念である。とくに地理Ａについては、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや地理的技能、思考判断など地理的な見方・考え方をより意識して作問をお願いしたい。また、初見の図表・グラフが多く、問い方が変則的な設問がみられることに加え、組合せの小問が多数みられることなどの要素が加わって、歴史や公民科目と比べ時間がかかり、また、90点以上の高得点が取りにくい状況などが課題である。

⑵　設問数や形式について

大問数は地理Ａ５問、地理Ｂ６問で昨年度と変わらなかったが、小問数は本試験と同様に地理Ａ・地理Ｂともに36問に戻った。小問数が増えたことは決して好ましくないが、配点のアンバランスがやや解消に向かうことや設問数を変えずに解答数だけ増やしている点は救いで、次年度以降もこの形式が踏襲されることを望みたい。

問題の形式については、①組合せの設問が引き続き出題されていることに加え、②地理Ａ・地理Ｂともに図表が多く出題されたこと、などの指摘があった。

①については地理Ａでは７問、地理Ｂでは11問が６択の「組合せ」の形式である。ただし、この他に地理Ａで文中の空欄をそれぞれ判別するなど４択となる「組合せ」の小問が２問、地理Ｂで１問みられた。②については、地理Ａ（地図・図10、地形図２、表４、グラフ１、写真６、絵・イラスト０）、地理Ｂ（地図・図13、地形図２、表４、グラフ５、写真２、絵・イラスト０）で、例年通り図表の読み取りを問う設問が多くみられた。これは、地理という科目の特性でもあり基本的に歓迎したい。ただし、情報を盛り込みすぎたり、作りすぎて難解となる、などの課題

がないようにくれぐれも精査を願いたい。

３　追試験「地理Ａ」について

地理Ａとは何か、地理Ａらしい設問とは何かをかなり的確に捉えて作問されている小問と、地理Ａの学習レベルの理解が不足している小問が混在している。現状、２単位の授業で扱える内容はかなり限られている。義務教育段階での社会科の学習内容も知識レベルではきわめて限られたものとなっている。その中で、今回も、出題範囲としては適切でありながらも、問える範囲を踏み越えた設問が複数みられた。本会で出た指摘を参考にしていただければと思う。今年度は、生活・文化色の強い地理Ａらしい大問があった点は評価する。しかし、相変わらず地理Ｂとの相違が明確でない設問がみられたことも指摘しておきたい。なお、問題の程度は本試験と比較しても平易で、今後もこの難易度を維持していただけたらと思う。

第１問　「地理の基礎的事項」　メルカトル図法の世界全図から小問を３問、その他の雑題が５問の構成。地理Ａの学習範囲というより基本的で常識的な内容が出題されている。本試験と比較すると基礎的事項の難易の程度はやや易となっている。

問１はメルカトル図における２地点間の距離。これは基本。

問２は図１中の４つの山脈からプレート境界に位置するものを選択する小問。平易。

問３は図１中の４地域の土壌のうち最も肥沃なものを選ぶ小問。これも基本。

問４は各気候要素の緯度ごとの平均値の大小。これも基本の知識。

問５は４つの農作物の中で栽培限界が最も高緯度のものを選ぶ小問。これも基礎的事項。

問６は主題図の表現方法の適否を問う正誤文選。定番の問。基本。

問７は地形図中の集水域の読み取り。等高線を追う基礎的事項も生徒にはやや難だろう。

問８は人工衛星の活用についての正誤文選。学習機会のない小問も常識で解答可で標準。

第２問　「国境を越えた様々な結びつき」　地理Ａの学習範囲の小問もあるが、知識を前提とする許容範囲をこえる小問もみられる。リード文が用意されているが必要性は感じない。本試験と比較すると正答率は高いだろう。

問１　４か国の日本への輸出品上位３品目。これは学習範囲といえ標準の難易度である。

問２　国際的な人の移動についての正誤文選。これは平易。

問３　３か国における留学先上位３か国の組合せ。旧宗主国や近隣の国を判断材料に正解にたどり着ける。程度は標準とする。

問４　日系ブラジル人に関する説明文の空所補充。基本的知識の組合せで平易。写真は良い味付けとなっている。

問５　ヨーロッパ各国の鉄道による国内旅客輸送量と国際旅客輸送量。地理Ａでありフランスよりイギリスを問うべきでは。フランスとスペインの比較はやや難。

問６　東京からロンドンへの旅客移動の経路の経年変化について述べた文の正誤文選。アンカレジ経由を知らない世代にはやや難か。

問７　４都市の、東京からの距離と週当たり便数を示した図から２つの都市を特定する設問。選択肢から実距離が必要なくなっている。単純にネの都市名を問うべきでは。標準の程度と考える。

第３問　「東南アジアの自然環境と生活・文化」　地理Ａを意識して写真を用いて生活・文化を問うなど好感がもてる大問となっている。本大問も、地理Ａにおいて地域を出題する際の例示となる。

問１　地図中の４地点の月平均気温と月降水量のグラフからシンガポールのものを特定する小問。基礎的事項で平易である。

問２　地図中の３つの地域で発生した自然災害。大まかな地域理解ができていれば解答は可能。標準の難易度とする。

問３　４か国の産業について述べた文のうちからカンボジアのものを選択する小問。それぞれの文が国を特定できるレベルであり地理Ａでも解答できる。標準。

問４　ラオスとその周辺に栄えた王朝の文化を写す壁画から読み取った内容の正誤文選。壁画を写した写真が興味深い。この写真を適切に生かした設問で大いに評価できる。程度は標準とする。

問５　４か国の宗教別人口割合。東南アジアでは定番の問。これは平易。

問６　東南アジアの工業化と農村部の変化を説明した文の正誤文選。推察し妥当性の低い肢文を選択することになり易問とはいえない。程度は標準とする。

問７　東南アジア諸国にみられる外国文化とかかわる日常生活を写した写真から、それを読み取った文章の下線部の正誤を問う小問。６者２択の形式も誤りは判別が容易であり標準とする。この問でも写真はよく生かされている。

第４問　「地球的課題と国際協力」　地理Ａでは定番の出題範囲であり、個性のある作問を行うのにも限度がある。その中では問５は興味深い問い方である。問２と問４は定番の設問ながら質の高さを感じ評価したい。

問１　出生率と死亡率の相関関係を分類した図と国家グループとの正しい組合せを問う小問。３か国のグループで示してあるので答えやすい。やや易。

問２　図中の３つの地域と水の利用と管理について述べた文との正しい組合せ。それぞれが既習事項である河川の流域であり正解にたどりつける。これもやや易。

問３　写真のみで都市名を問うには、この写真の情報が乏しい。せめて、目の付け所を指摘するなどの工夫がほしかった。成立しているとはいえず評価できない小問。

問４　世界の食料問題に関する正誤文選。高等学校の学習内容を踏まえた質の高い肢文である。やや易。

問５　NGOの活動について述べた文としての下線部の適否選択。①はPKO、④はODAの活動で不適とする設定。面白い問い方であるが意外に難か。

第５問　「鹿児島県の地域調査」　写真や地図、地形図に主題図を多用して、よい出来映えの大問となっている。地理Ａ学習者だから解答が困難となるような設問もみられない。ただし、本試験と比較して同じ程度に取り組みやすいが、学習機会のない内容を問う小問がみられ正答率はやや低めとなったのではなかろうか。

問１　地勢図上の３地点からの景観写真。似通った写真にみえるが桜島や対岸の見え方から判断は可能。やや易とする。

問２　新旧地形図を比較しての読み取りの正誤文選。定番。平易。

問３　降灰の状況を示す主題図の読み取りの正誤判定。これもやや易。

問４　桜島の降灰や噴石に対応した施設。茶畑の防霜設備はセンター試験でも過去に出題されたが現場での学習機会はまずない。解答は①～④にばらつくのでは。やや難。

問５　シラスの分布と自治体別の栽培作物の割合。シラス台地についての知識理解があれば解答は可能も現行の指導要領を踏まえると、もう少し火山灰土の性質などの説明が必要だった。図を含め、小問としてのつくりは評価したい。やや難とする。

問６　調査方法について述べた文の正誤文選。平易。

４　「地理Ｂ」について（地理Ａとの共通問題を除く）

今年度の追試験地理Ｂは、昨年度と比較して受験生が納得するレベルとなっている。相変わらず解答に時間がかかるものの、ここ数年、大問のテーマに変化がないことで、作問は大変厳しいとは想像に難くないが、それによって、より細かい知識を問うようにならないように注意されたい。国・地域や都市を扱う場合などには、細心の注意を払うようにお願いしたい。

第１問　「世界の自然環境とその変化」　珍しい問い方の小問が続き戸惑った受験生が多かったのではないか。時間はかかるが、学習の成果を問う大問という印象ではある。

問１　世界地図上の線に沿った植生と土壌の変化。気候区分が地球規模で大観できているかが問われている。迷う要素もあり時間がかかる。標準。

問２　地図中の４つの河川流域のうち、アマゾン川の下流部の月平均流量をグラフから選択する小問。各河川の流域の気候の理解が問われている。標準。

問３　南半球において熱帯低気圧の発生しやすい海域の組合せ。問い方で戸惑う。標準。

問４　世界の大地形を説明した文の正文選択。平易。

問５　氷河融解による過去２万年の海面の高さの変化を示した図をもとに説明した文の正誤判定。肢文が長く判別に時間がかかる。標準。

問６　アジアでマングローブ林が減少している主な要因。地域別のマングローブ林の分布面積の変化を示した図が全く生かされていない。③と④で迷う。易問なのか。事実の検証は大丈夫なのだろうか。

第２問　「エネルギーと産業」　産業分野のうち、エネルギー資源と産業に特化した小問構成で、取り組みやすそうでありながら、案外幅広い知識を要し、受験生にはやや難易度の高い設問が並んだ。

問１　４か国の原油生産量の推移を示すグラフを読み取ったりその背景を述べた文の正誤判定。「政経」の要素が強い。標準。

問２　３つの自然エネルギーと、それらの発電量上位４か国の組合せ。定番で標準。

問３　都道府県別の農家１戸当たりの耕地面積、耕地面積当たりの農業産出額、農業産出額当たりのエネルギー使用量を示す階級区分図の読み取り。地理的な見方・考え方が問われている。やや難も良問である。

問４　バイオマスエネルギーに関する説明文の下線部の正誤選択。誤りが明確で標準。

問５　BRICs諸国の製造業雇用者数についての業種別構成比を示した表から、空欄と業種名の正しい組合せを考察する小問。各国の特徴を理解できているか。標準。

問６　1990年以降の日本企業の立地の変化について述べた文の正誤判定。標準。

第３問　「都市と村落、生活文化」　意欲的な作問がなされた印象で好感がもてるが、その分理解に時間がかかるなど難問にあたる小問もみられた。

問１　３か国の人口上位３位の都市とその標高。図中の凡例と国を組合せる形式で、定番の国であり判別は可能である。標高が面白い。程度は標準とする。

問２　３都市における利用交通手段。オランダあるいはアムステルダム市民の自転車利用が知識としてあれば解答可能だが。標準。

問３　東京圏の各市区町村における世代Ａの人口割合の経年変化。階級区分図の読み取りと変化の背景を述べた文章の下線の正誤選択。世代Ａという設定や図は興味深いが、文章が長く解答には時間がかかる。また、④は東京在住であれば間違いなく誤文とわかるが、正しい理由がわからない。程度はやや難とする。

問４　４つの都市の居住環境について述べた文の正誤文選。踏み込んだ内容でやや難。

問５　大潟村の集落の写る地形図の読み取り。誤文がはっきりしている。やや易。

問６　日本における都市と農村の交流に関して述べた文の正誤文選。やや易。

第４問　「太平洋を中心とした地域の地誌」　問１から問３は地理Ａとして出題することも可能なつくりとなっているが問４以降は知識問で、作問に練りが不足していると感じる。

問１　地図中に示された南北半球にみられる海流の流れの向き。基礎的事項。

問２　地図中の４都市のハイサーグラフからオークランドのものを選択する小問。月が示されていなくての解答は可能。やや易。

問３　地図中の３地域と食文化を説明した文の正しい組合せ。地理Ａでも出題が可能な小問。標準。

問４　太平洋の島々の社会経済状況と課題について述べた文の下線部の正誤判定。単純な知識問で標準。

問５　外国生まれのオーストラリア在住者の推移を示したグラフを読み取ったりその背景を述べた文の正誤判定。誤文は学習内容であり解答は容易。白豪主義が撤廃された時期で誤るのはどうか。

問６　３か国からの日本への輸出品。スタンダードな国ではないので難しい。

第５問　「現代世界の諸課題」「難民」や「出稼ぎ」など人の移動にからめた諸課題が出題された。比較的作問に困難を感じる項目であり、意欲を評価したい。問２のように、出題の対象となる国・地域や都市の選択を誤ると、一気に難問になることを改めて銘記しておきたい。諸課題の小問には、とくにこの傾向が顕著になっているので重ねて注意を喚起する。

問１　難民の主な発生国・地域を示す図をもとに、難民について述べた文の下線部の正誤文選。図を生かした作問になっている。程度はやや易とする。

問２　３か国の難民の発生状況とその背景について述べた文と国名の正しい組合せ。あまり扱うことのない国や踏み込んだ内容の説明文で難問である。

問３　５か国の人の移動に関する肢文の正文選択。５者２択の形式。内容的には学習内容であり標準とする。

問４　４か国の海外出稼ぎ労働者からの送金受取額と送金支払額からインドのものを選択する

小問。これは初見の表と学習の薄い内容。各国の経済状況等から判別は可能と思われるが難度はかなり高い。

問５　フィリピン人の海外出稼ぎ労働者に関する表から述べた文の下線部の正誤判定。表が興味深い。背景に下線が引かれているため表が生かされてはいない。標準。

第６問　「鹿児島県の地域調査」　地理Ａとの共通問。コメントは地理Ａ第５問参照。地理Ｂでは標準からやや易のレベルで適正な難易度となった。

５　要　　約

追試験の地理Ａ・地理Ｂを設問単位で検証した結果、本年度は昨年度に引き続き、高等学校までの学習内容を逸脱した難問・奇問にあたる設問は少なく、また判断に迷う表現もあまりみられなかった。

評価できる点としては、地域調査の大問が引き続き良問となっていること、工夫された図表やテーマ設定が複数みられること、である。良問と評価した小問はそれぞれ評判が高かった。

一方で、やや知識理解に偏った旧課程的な設問は少なからずみられることは例年通りの課題である。知識を学ぶ学習がこれまでより一層減っている現状では、知識を前提とする設問にはより深い配慮をお願いしたい。日本のことならわかっている、という考えも捨てていただきたい。地域調査で設問文に出たシラスもその例である。先生方相互のチェック機能を十分に働かせて、学習範囲の確認をしっかり行ってほしいと思う。作問される先生方の想像以上に、受験生の常識レベルは薄く、授業内容は言葉としての理解に留まってしまっていることを、われわれ現場の教師は日々感じている。

本会は例年、⑴基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、⑵授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、⑶専門性の高い作問者の常識と受験生のそれとの落差に留意すること、⑷解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしている。本会は学習の成果を踏まえた設問であれば難問でも評価する。今年度も作問者のご苦労は感じ取れた。次年度以降もわれわれの手本となる問題の作成が行われることを大いに期待して講評を終わる。